

# 組織目標評価報告書（平成25年度）

部局名： 文学部

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p><b>①教育領域</b></p> <p><b>①-1 目標</b></p> <p><b>①学生サポート体制の充実</b> 改修工事の完了をふまえて、学生総合支援室やリフレッシュルームの効果的活用など、あらたなサポート体制の構築にとりくむ。また引き続き障がい学生の支援にもつとめるが、メンタル面の問題やキャリア支援など、個々の学生の状況をきちんと把握し、それぞれにふさわしい対応をはかるとともに、教員間の認識向上につとめる。</p> <p><b>②国際交流の推進による新たな体制の構築</b> グローバル人材育成院やキャンパスアジアをはじめとする全学の動きに連携し、学生の異文化理解・学習や留学支援をおこなう。また新たな海外大学との協定拡大につとめる。</p> <p><b>③学部における外国語教育についての検討</b> 文学部が標榜する多言語・多文化主義の内実を充実させるべく、言語教育センターの関係者とも連携し、将来像の具体化をはかる。</p> <p><b>④学士教育の質向上にむけてのとりくみを進める。</b> 文学部にふさわしい教育成果の明示化についてその具体化をすすめる。また入学時から卒業時までの学生の認識や具体的活動に関する調査と分析をおこなう。中長期的な教育組織の再編についてさらに検討を進める。</p> <p><b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b> 学生による授業評価 教育課程の内容・構成 卒業生アンケート</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>①改修工事の完了後、文学部の学生総合支援室を整備し、リフレッシュルームの使用規定を設けて、効果的に活用できるようにした。全学とは別個に文学部学生向けの学生相談ルーム、キャリア相談室の積極的な利用を呼びかけ、メンタル面の問題、キャリア面の問題に対応できるようにした。また障がい学生の支援を継続するとともに、さらなる支援策の充実をはかるため、他大学への視察を実施した。『文学部学生支援ガイド』2013年改訂版を発刊し、教員の学生支援に関する認識向上をはかった。</p> <p>②グローバル人材育成院やキャンパスアジアの活動には文学部として積極的に参加した。新たな取り組みとして実施した文学部講演会シリーズ「ニホンガク最前線」は、外国人研究者による講演シリーズであり、学生の異文化理解の深化に寄与した。また、様々な留学説明会を開き、学生の留学を支援した。ベルリン自由大学歴史文化学部と新たに部局間協定を締結し、学生の受入、派遣を行った。従来の協定校との学生交換も引き続き活発に行われている。</p> <p>③Q-cumシステムの検証により文学部学生が積極的に外国語科目を履修していることを確認した。また、言語教育センターの教員を交えた会合をもち、外国語教育の将来像について検討した。また、外国の大学での語学研修、語学教育のあり方について検討し、学生の語学能力を向上させるように努めた。協定校であるドイツ・ポーフム大学の語学センター・センター長の講演会を催し、語学教育についての文学部教員の理解を深めた。</p> <p>④将来構想検討協議会で今後の学士課程教育の新たなシステムについて検討し、ある程度方向性を打ち出すことができた。今後も、さらに検討を加える。在学生を対象に、教養教育についてのアンケートを実施し、多くの学生が教養教育を高く評価し、その重要性を認識していることを確認した。</p>
<p><b>②研究領域</b></p> <p><b>②-1 目標</b></p> <p><b>①文学部共同研究プロジェクトの新たな具体化</b> 第二期中期計画のなかで文学部が継続してきた研究プロジェクトについて、その総括をはかるとともに、新たな研究プロジェクトの具体化をはかる。</p> <p><b>②地域貢献を視野に入れた学際的研究の推進</b> 地域を対象とする研究・教育をすすめてきた複数領域を中心に、教育とも連動した形で学際的研究を効果的に実施するための具体的方策を検討する。</p> <p><b>③研究成果の集約と整理</b> 文学部教員の研究成果を集約し、公開のための条件を整備する。</p> <p><b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b> 共同研究の実施状況 科研費申請率</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>①第二期中期計画で文学部が継続してきた研究プロジェクトについて、これを総括する研究論文集を刊行した。また、新たな研究計画につながる複数の単年度プロジェクトを立ち上げ、対話型・ワークショップ型といった成果発表の方法も新たに工夫している。</p> <p>②地域を対象とする研究・教育を進めてきた領域では、地域総合研究センターの「まちなかキャンパス事業」に採択された学生による調査プロジェクトを実施し、アクティブラーニングの実践に取り組んだ。学際的研究の効果的実施方法を検討するためのカリキュラム検討ワーキンググループを設置した。</p> <p>③文学部資料室を整備し、文学部教員のこれまでの研究成果を随時閲覧できるようにした。また、新たな研究論文集を機関リポジトリを通じて公開した。</p>
<p><b>③社会貢献(診療を含む)領域</b></p> <p><b>③-1 目標</b></p> <p><b>①各種公開講座の継続・充実・発展</b> 引き続き学外の市民向け講座を積極的に展開する。</p> <p><b>②研究成果を市民に公開する講演会・シンポジウムの開催</b> 学部のプロジェク研究の成果を活かし、市民と共に学べる会を開催する。</p> <p><b>③海外大学との交流推進</b> 文学部における教育研究を活性化させようという観点を保持して、海外大学との交流を拡大する。</p> <p><b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b> 海外大学との協定 市民向け公開講座・シンポジウムの開催 地域貢献への協力</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>①文学部公開講座「ヨーロッパ文学・芸術の中の女性像」を開催した。約50人の出席を得て、好評であった。</p> <p>②文学部講演会シリーズ「ニホンガクの最前線」として4回の講演会を開催したほか、4回のシンポジウム(「アジアのなかの〈練り供養〉」(県立美術館の特別展と連動)、「仕事の未来へー私たちのライフデザイン」(岡山県の委託事業)、「孤児院一子どもと社会が交わる場所の史的源流」(文学部プロジェクト研究)、「あなたが〈介護者〉になるときーケアラー(無償の介護者)支援の最前線から考える」(文学部プロジェクト研究))を開催した。これらの会には多くの市民が参加し、市民とともに学べる場を作り出すことができた。</p> <p>③②の講演会シリーズでは、カナダ、イギリス、ドイツ、韓国、中国の研究者が講演し、海外大学との交流を拡大することができた。このうち、ドイツからの研究者は新たに交流協定を締結したベルリン自由大学歴史文化学部の教授であり、岡山大学国際交流基金に基づいて招聘した。協定を通じての交流を、この講演によってさらに活発にすることができた。また、中国から招いた講演者の所属先である北京日本学研究中心とは、社会文化科学研究科が交流協定の締結を進めているところであり、締結に先立つ交流を促すことに寄与した。</p>
<p><b>【総括記述欄】</b></p> <p>文法経1号館の改修が終わり、文学部の教員全員が一つの棟に研究室をもつことができるようになった。これによって、学部としての一体感がさらに強化されるとともに、学生総合支援室、文学部資料室等を整備することができた。</p> <p>文学部講演会シリーズで4回の講演会を開催し、いずれも海外の研究者を講師に招くことができた。これによって、文学部の国際交流、教育、研究、社会貢献の活動を活発化することができた。</p> <p>執行部が中心となって文学部の今後の教育システムについて新たな方向性を打ち出すことができた。今後は、これをさらに具体化していく。また、これにかかわって、社会文化科学研究科文学系でより広い視野をもって今後の人事を行っていくために、新たに人事委員会を設置することになった。これは全学的な視野に立った教員人事を目指すものである。</p>	